
ルソーとワインとジャズと

金剛石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルソーとワインとジャズと

【Nコード】

N6672I

【作者名】

金剛石

【あらすじ】

現実的だけど幻想的、そんな話に世間の動きも混ぜて、自分なりに“あの事件”について考えながら描きました。ワインを片手にリラックスして読んだら良さそうな感じにしたつもりです。

（前書き）

「殺し」について深く考えながら書いたものです。

——夜の闇に私は降り立つ——

葉にたまった露がつうつと流れ落ちるかのように、ピアノが滑らかに音を紡ぎ始める。

その軽やかで不思議な音色に、張りのある鋭くも美しいトランペットの吹奏が加わる。

それらに続くようにして、サックスの柔らかく甘美な音色や、ベースギターの心地よい低音、流れる小川のように繰り出される軽快なドラムの演奏が次々と混ざり合っていく。

アフタービートの利いた独特の力強いリズムとスイング。西洋音楽と黒人の民族音楽とが融合して生み出されたもう一つのミュージック。

ジャズだ。

心が落ち着く藍色のダウンライトが、静かに店内を照らしている。奥にある小さなステージでは、夜会服のようなものを着た数人の音楽家が即興でジャズを演奏していた。

店内は特別広いわけでもなく、かと言って狭すぎるわけでもない。客の数もまばらで、ステージの近くに一人、カウンター席の壁際にもう一人、そして、カウンターの中央にいる私とバーのマスターを

含めて四人しかいない。

私としては、客は少なければ少ないほどいい。私がこのバーにしょっちゅう通うことになったのは、客の少なさとワインの旨さに惹かれたからだ。ワインは静かなところで、一人で飲むに限る。

このバーのマスターは、五十代にしては若々しく見える人物で、短く切られた灰色の髪を綺麗に整えている。私は彼とは気が合う仲間だった。そのことも、私がこの店の常連になった一因でもある。

私は上質なフランス製のリング酒を飲みながら、心に響くジャズ・ミュージックに耳を傾けていた。

夜の十一時を回る頃には、私以外の客は皆帰っていった。このバーの閉店時間は真夜中の十二時。あと一時間近くもある。

「やつぱり、あんたは閉店時間ぎりぎりまで飲んでいくんだな」
それまで黙っていたマスターが、小さな低い声で話しかけてきた。ステージでは、まだジャズの演奏が続けられている。あんなに音楽を弾き続けていて、よく疲れないものだなど、いつも感心させられる。

「あいつらは楽しんでるんだ」
マスターが唐突にそう言った。私は、そのマスターの方に顔を向ける。私が演奏家達を見つめているのを見て、心の内を読んだのだろう。

「楽しんでいる？」

私は思わず訊き返した。「楽しいと疲れないのか？」

マスターは清潔な布で、洗ったグラスを拭きながら、私の目を見て少し笑ってみせる。

「人間、誰しも自分が好きなことをやってるうちは、疲れなんて感じないもんだよ」

「そんなものか？」

「そんなもんだね」

マスターは肩をすくめてみせた。私はまた一つ学んだ気になる。

ちょうどその時、バーの店の扉が静かに開いた。扉は軋む音一つせず、再び閉ざされる。

入ってきたのは、サングラスをかけ、今時の若者らしくルーズで派手な身なりをした二十代くらいの男だ。長く伸ばした茶髪はワックスで固められている。青いダウンライトの柔らかな光の中、その男はしばらく突っ立っていた。

「お、あんたか」

マスターが少し驚いたようなそぶりを見せた。

若者がサングラスを取るのを見て、私は納得する。彼は、私がこのバーに頻繁に出入りするようになる以前からここの常連となっていた人物だった。彼は私とマスターに向かって微かに笑いかけ、私の隣の席に腰掛けた。

彼はいつも思い詰めた表情をしていた。何か複雑な事情でもあるのだろうか、私にそれを訊く義理は無い。だが、それは私と彼が知り合って一年が経っても変わらないままだった。さすがにおかしいのではないだろうか。一年経っても消えない悩みなどもあるのだろうか。

「指名手配のあいつ、捕まりましたね」

独特な盛り上がりを見せているジャズの演奏をよそに、彼はポツリと呟いた。目はぼうつと天井のダウンライトを見つめている。

「あいつって、今ニュースで取り上げられてる奴のことか？」

マスターが拭き終わったグラスを棚に戻しながら訊いた。怪訝そうな顔をしている。

「はい。英国人女性死体遺棄事件の犯人とされ、懸賞金一千万円で指名手配されていた男です」

「そうなのか？」

私はそれを聞いて驚いた。私の知る限り、その指名手配犯は顔の整形手術を受けて、行方をくらましたはずだった。いつの間に逮捕されたと言うのだ。

「おい、演奏中だぞ。でかい声は出すな」

マスターが私を軽く諫めると、彼に説明を求めるかのように目配せする。

「実は今から四時間前ほどに、警察に通報が入ったようですね。それで身柄を確保されたんですよ」

「それは知らなかった……」

私はリンゴ酒をぐつと煽ると、グラスを空にした。口の中に濃厚でまろやかな甘みが広がり、熟成したリンゴのにおいが香る。

「捜査の網をすり抜けて、長い間隠れていたから、罪は重いだろっ
な」

マスターがそう言って、ふうつとため息をつく。目は宙のどこかを見つめていた。

——人を殺したんです——

私はその言葉を聞いて、耳を疑った。少し飲み過ぎたのかもしれない。あまりに突拍子もない言葉だった。

「一年ほど昔のことです……」

その若者はどこか悲しげに語り出す。深く椅子に腰掛け、生気の無い虚ろな目はジャズを演奏している音楽家達に注がれていた。

暗い夜の路地裏で、男が一人、肩で息をしながら突っ立っている。その二十歳くらいの男は、震える右手でナイフを握り締めていた。刃からは、紅い鮮血が滴り落ち、地面のコンクリートに赤黒いシミを作っている。

男の目の前には、五十歳近くのおやジが横たわっていた。おやジの空虚な目が、驚きと恐怖に見開かれたまま、非難するかのよう、血塗られたナイフを手にしている男を睨み付けている。

男はカタンとナイフを地面に放り出し、夜の闇に向かって駆けていった。後には、胸の切り傷から大量の血を流して死んでいるおやジだけが残された。おやジの目は、男が姿を消した闇をじっと不気味に見つめていた。

「俺は頭の中が真っ白になっていました。殺すつもりはまったく無かったのに……気がついたら、取っ組み合っている時、その人の胸に、その人の持っていたナイフを突き立てていた……」

私は空になったワイングラスを眺めながら、彼の話を黙って聞いていた。

「俺は怖くなって逃げ出しました……。動揺していて、凶器のナイフも現場に放って……」

彼は自嘲気味に微笑した。目には相変わらず生気が無い。まるで魂が抜けてしまっているようだった。

「もちろん、指紋はベタベタ付いてましたよ……。俺は警察から隠れました。今、こうしてここにいるように……」

「どうして隠れようと思ったんだ？」

マスターが単刀直入に訊く。険しいような、優しいような、微妙な表情をしている。

「先にナイフを突きつけて、金を寄越せと言ってきたのはおやジの方なんだろ。それだったら、多少罪は軽くなるはずだ」

「確かにそうです。でも……」

そこで彼は言葉を止めた。思い詰めたような、複雑な心情の顔をしている。

「でも……？」

マスターが小さな声で先を促す。

「俺は時間が欲しかったんです」

「時間？」

「ええ。心を整理する時間です。自分のしたことを見つめ直す時間が欲しかった……。それが終わったら警察に自首しよう、そう思っていました……」

彼はふと顔をこちらに向けた。そして、虚ろな目で私とマスターを交互に見つめる。

「でも、結局は……できないままでした……」

「なぜ？」

マスターが再び尋ねる。音楽家達は一通りジャズを奏で終えて、ステージの奥に姿を消していた。店内は、ただ藍色の落ち着いた光に包まれていて、静寂としている。

「恥ずかしい……とでも言いましょうか……」

「恥ずかしい？」

意外な答えに、思わず私はおうむ返しに訊く。彼は疲れたように短いため息をついた。

「あんなことをしてかして……親に会わせる顔が無いんです……」。

俺が殺してしまった方の友人や家族、親戚の方なども悲しませてしまった。そして何より、自分自身が情けなく思えて……恥ずかしいんです……。こんな顔を世間に晒さらしたくは無い……」

「なるほどな」

マスターが頷いた。そして、ピカピカに磨かれた透明なウィングラスを三つ用意する。

「過失は恥ずかしいことである。だが、過失を改めるのは恥ずかしいことではない」

マスターのその言葉に、私は聞き覚えがあった。

若者の虚ろな目に少しでも光が宿り、マスターへ視線が注がれる。

「社会契約論」を創作したジャン・ジャック・ルソーの言葉だ」

マスターが若者の視線を受け止めて小さく笑う。私は、二百五十年ほど昔にルソーという男と話したことを思い出した。

その思想家は従来の封建制度を強く批判し、人々の自由を優先するべきだと言っていた。彼の考え方は後のフランスで起きた革命に大きな影響を与えていたはずだ。

「ずいぶん昔の思想家の言葉ですね」

若者はクスクスと笑って、言った。彼の目に微かな光が宿っている。

「でも……感動しましたよ」

マスターが足元の戸棚から、黒いボトルに優雅なラベルが貼られたワインを取り出した。そして、物静かにコルクを引き抜き、先ほど出した三つのワイングラスにゆっくりと注ぎ始める。半透明の赤い液体が緩やかに流れ込み、きめ細やかな泡が無数に発生しては儚く消えていく。芳醇な葡萄酒の香りが辺りに漂い、ほのかな甘みが鼻腔を満たした。

「すばらしい」

私は思わず呟いた。今まで飲んできた赤ワインの中でも、最高の香りがした。そこの安ワインとは格段に違う、高貴で、そして濃密な芳香だ。

「ジャック・セロス・シュブスタンス」

マスターが恍惚とした表情でグラスに注がれた赤ワインに見入っている。

「フランス最北のワイン生産地、シャンパーニュで生まれた高級赤ワイン。ピノ・ノア、ピノ・ムニエ、シャルドネの三種のぶどうのみを原料とした逸品」

マスターがワイングラスを私と若者の前に差し出す。魔法の液体が何かのように、赤いワインが藍色のダウンライトの光を受けて魅惑的に煌めいた。きめの細かい泡は、グラスの底から静かに立ち上っている。

「友人が送ってきてくれたものでね。一人で飲むにはもったいない。俺のおごりだと思って飲め」

マスターは自分のグラスを右手で掲げた。

「乾杯」

マスターは微笑して、言った。私はあえて何も言わずにグラスを手を持ち、マスターのグラスに軽く打ち付ける。澄んだ甲高い音が、小さく奏でられる。若者も、ためらいながらワイングラスをマスターのそれに優しくぶつけた。

「もう一曲分、飲もう」

マスターがステージに現れた音楽家達に目をやった。

私はバーを後にした。時刻は夜の十二時を少し回ったくらいだ。今夜は冷え込みが酷いのか、吐く息が路傍の街灯に白く浮かび上がっている。私は、都会の夜の街へ歩み入った。

数日後、私はテレビのニュースで、あの若者の写真を見つけた。彼を連行する警官達とそれを取り囲む報道陣が写っている。彼はフードを被っていないかった。その表情は、どこかすがすがしかった。

『ルソーと赤ワインとジャズ……そして、俺の罪に誓って……』

あの晩、彼は決意した。彼は過失を改めるために、歩み出したのだ。

彼はこれからどうなるのだろうか。私には分からない。それを見守ることはできても。

私は桜が咲く少し前に、この“世界”を去ることになるようだ。だが、あの桜を見た時の感動は一度でいい。いや、一度の方がいい。

あの馴染み深いバーに、二度と訪れる日は来ないだろう。

私はこの“世界”で実にたくさんのことを学んだ。

私が再びこの“世界”にやって来る日は万年先か……億年先か……

この“世界”で過ごした最後の一年は、特に充実していた。それまで空虚な存在だった時間が、初めて長く、価値あるものにした。

私は、星空の闇へと続く階段を静かに上り始める。

——夜の闇に私は飛び立つ——

（後書き）

今回は抑揚をほとんどつけないダークな感じに仕上げました。主人公の謎の存在や、ルソーという昔の思想家の話に、ジャズやワインやらを加え、現実の事件なども絡めて、リアルさと幻想的な感じを両立させたつもりですが……未熟なため、稚拙な文に変わりなく……。お楽しみ頂けたら幸いです。オチらしきものもつけようかと悩みましたが、淡白でやるときめたらとことん淡白で！と。いいオチが見つからなかった件の言い訳ですね。

読んでくださった方、誠にありがとうございますあゝm
――）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6672i/>

ルソーとワインとジャズと

2010年10月17日03時06分発行